

僕たちの会話が一区切り終えたところで、リリエールは「恐らくその通りね」と口を挟はさんできた。よく見たらえげつないサイズのパフエが半分以上崩落していた。食べるの早すぎませんか？

「私が推測すいそくするに、この事件の犯人の女の子は、定期船で国の中まで来た女の子よ——何の目的かは知らないけれど、国に来た瞬間に大聖堂で祈りを叶えたみたいね。それでいて、ギャンブルで金を稼かせぎまくったと」

「でも定期船に乗り込んでくるのは金持ちばっかりでしょ？ カジノで荒稼あらかせぎしなければならぬ理由がどこにあるってのさ」

「それはほら、アレよ」

「アレとは」

「……自分で考えなさい」

「……」つまり分からない、と。なるほどなるほど。

「けれど、それにしても魔女の格好をわざわざしている理由も分からないね」

「それはほら、アレよ」

「……アレとは」

「可愛^{かわい}いから」

「確かに魔女の格好は可愛^{かわい}いでありんす」「萌^もえるでやんす」

なんだろう一寸^{いっすん}たりとも納得いかない。

この国には魔法使いと呼べる者が存在しないというのな

らば。

そもそも魔女の格好などしていたら目立って仕方がないはず。外から来た子だというのがなら金持ちのはずだし、金を稼ぐ必要すらないはず。

今しがた立てた推論では、まるで必要のない手間をわざわざかけている七面倒しちめんどうくさい犯人像しか浮かび上がらない。「ともかく」リリエールはスプーンをくるくると回したのち、パフエの山に刺した。「現時点で分かることはただ一つよ——相手は何を考えているのかまるで全く分からな

い」
「……………」

「慎重に事を運ぶ」といってしまっしょい」

パフエの山をぎくぎくと崩していくリリエールだった。
そして、

「ところでマクミリア。私はこのあとパフエをあと二つほど追加注文してから行くから、先にカジノに行つて、例の女の子に接近してくれないかしら。あなたが相手とお友達になつた後なら、私も相手に接触しやすいわ」

「要するに囧おとりでありんすな」「やんすね」

「えーやだよ面倒くさい」

「そう言うと思つた——だからこれあげるわ。好きに使つてもらつて構わないわよ」

リリエールはテーブルの上で封筒ふうとうを滑らせ、こちらに寄りこした。

分厚い封筒だった。

開いてみると金がたんまり入っておられた。たぶんさつきのバッグに入っていた金の一部。

「僕、カジノ、大好き」

「それはよかった。うふふふ……」

「へへへへ……」

「こいつら金に汚いでありんす」「薄汚れた大人の匂いがするでやんすな」

僕は幸せにまみれて、リリエールも幸せだった。これぞういんういんの関係といえるね！ とうか金に汚いとか双子に言われたくないかな！

……。

しかしながら僕の頭の中では、やはりカジノで荒稼ぎを
している女の子のことが引っ掛かっていた。

僕はテーブルにある紙切れに視線を落とす。

どうして魔女の格好なんてするんだろう。

灰色はいいろの髪かみと。黒のローブ。それに黒の三角帽子。

まるで本の中の魔女みたいな、本の中から出てきたかの
ような格好に、いったい何の意味が込められているのだろ
うか。

……。

ま、とりあえずこの金を三倍くらいに増やしてから細か
いことは考えようかな！ えへへ。

○

まぶしいほどに輝く金色にまみれた店内だった。

まるで宮殿を丸ごと借りてきたような絢爛けんらんな店内には、まばらながらに人——人間と、魔族と、獣人——の姿がある。

ルーレットがからからと回り。ディーラーが華麗かれいな手さばきでカードを配り。サイコロがボードの中を転がっていた。

華美かびな室内では俗ぞくにまみれた大人たちが金と欲おぼに溺れていた。歓声と悲鳴が喧騒けんそうの中で入り乱れていて、どういうわけかその場にいるだけで気分が高揚こうようした。脳から変な汁

が出そう。

「……ぬ」

僕は騒がしい店内をほどほどに進み、ポーカーのボードまで赴おもむいた。人々の阿鼻あび叫喚きょうかんが飛び交う絢爛な店内で、そこだけやけに重苦しい雰囲ふんいき気を立ち込めている。

四方を本一冊ぶん程度の外壁で囲んでいるボードの中からはチップの山が誇らしげにひよっこりと顔を出していた。積み方を誤ればすぐにでも雪崩なだれを起こしそうなくらいに積み重なっているチップ達の傍そばに腰を下ろしているのは、一人の少女。

それは紛まぎれもなく、彼女だった。